

1. 鶴川の住宅街にひっそりと佇む「あとりえ・う」 2. 大切に何度も修理を繰り返し愛用した道具の数々 3. 作業場にて 4. 作品や様々なグッズも販売されている 5. 版画集「山のぬくもり」より「遠い山」(1978年) 6. 緑と木の温もりに心癒される



畦地 梅太郎 (あぜち うめたろう) 愛媛県北宇和郡二名村(現・宇和島市三間町)出身 1986年 三間町名誉町民 2003年 畦地梅太郎記念美術館開館
あとりえ・う 町田市鶴川1-13-12 042-734-8586 開館日/木～日・祝 11時～16時 <http://www.atelier-u.net/> ●畦地梅太郎木版画展「とぼとぼ九十年」12月27日まで

山と家族を愛した 時代の先駆者

1996年、随筆家の白洲正子と共に町田市初の名誉市民となった版画家・畦地梅太郎。山を愛し、山の版画家と異名を取る彼の作品には、素朴で情感に満ちた独特の世界観があり、死後16年の時を経て全くとなく色褪せることなく、今もなお、輝きを放ち続けている。

特集 2 町田市名誉市民 畦地

梅太郎

1902年、愛媛県北宇和郡に生まれた畦地梅太郎は15歳で離郷。最初は油彩画家を目指すも、24歳の時に内閣印刷局活版係の職に就いたことがきっかけで版画の道を進み始めた。1937年の夏、軽井沢の浅間山に魅せられ、山をテーマにした作品を描き始める。自身の心情を投影したとも言われる『山男』は彼の代表作だが、作品のテーマは実に身近で、晩年は家族をテーマにしたものが多い。孫が生まれると決まって山男と小さな子どもが描かれた版画が作られた。版画だけで生活出来るようになったのは70代からだと言われている。それまでは本の装丁や挿画の仕事をよく受け、太宰治や井伏鱒二、島崎藤村、遠藤周作など錚々たる作家の書籍を飾っている。特に室生犀星は彼の作風をこよなく愛し、装丁や題簽、題字の多くを依頼した。寺田元町市長も初めて書籍を作る際に、畦地の元を訪れたという。

かつて「半画」と呼ばれることさえあった版画を、後輩たちのために美術界での位置付けを高めようと懸命だった彼は、1983年に市立博物館で展示会が開催されると、275点の展示作品をその後全て市に寄贈。版画専門の美術館設立を懸命に訴え、国際版画美術館の創設に尽力した。

町田を終の棲家としたのは1976年。20年程住んでいた世田谷から豊富な緑と広々とした環境を求め、たまたま選んだ鶴川。自然に恵まれたこの地をとて気に入ったが、周囲の人に自身の仕事を語ることは一切なかった。「絵描きらしくない恰好でその辺を歩くと、お百姓さんだと思われる。本人もそう言われて特否定定もなかったみたいで、笑うのは長女のみ江子さん。自由人で、何一つ家族に押し付けることも、自身の業績を話すこともなかった。家族想いで、家族もそんな畦地を受け止めていた。「展示会の準備が間に合わず、家族総出で手伝ったことがあります。父が刷り、母がアイロンをかけ、子どもたちが額に入れる。4人兄弟だったので6人がかりで夜通しやりましたね。」家族愛に包まれた鶴川のアトリエでも多くの作品が生み出された。

大切に使い込んだ道具が今も並ぶ「あとりえ・う」は窓に映る緑が美しい。今でも彼の息遣いが聞こえてきそうな工房は静かな時を刻んでいた。